ACFOD（発展のためのアジア文化フォーラム）第六回総会

八月十六日―十九日（水俣）

大橋成子

八月十六日から四日間、PP21に連動して、水俣でACFOD（発展のためのアジア文化フォーラム）の第六回総会が開かれた。

ACFODとは、アジア太平洋十四ヵ国の民衆の立場にたつ草の根の団体、個人の連合体である。一九七五年にFAO（国連食料農業機関）が「飢えからの解放キャンペーン」を呼びかけ、アジアの民衆の側からの開発＝発展に携わる諸団体、諸宗教の社会フォーラムを作った。アジアの漁民会議、演劇ワークショップなどを組織し、八〇年代に入ってからは労働者（AWSL）、農民（PDP）、女性、漁民、文化などのプログラムに分かれ、南アジア、東南アジア、東アジア、太平洋諸地域で活動をつづけている。タイのバンコクに事務局を置き、コーディネーターとACT（ACFOD調整委員会）が各プログラムと連携をとって活動を推進している。現在コーディネーターはバングラデシュのアブダス・モハマド・サブール。ACTは九ヵ国から九名が選出されている（フィリピン、インドネシア、パキスタン、ネパール、スリランカ、インド、タイ、アオテアロア、日本）。

総会は三年に一回で、前回八六年にはタイで開かれた。その後八七年にPP21の国際的なよびかけがあり、アジア太平洋地域の民衆運動のオルタナティブを模索するACFODは様々なアジアの団体のなかでも、まっさきに全面的な支持のメッセージを送ってくれた。

そして、八八年四月にシドニーでＡＣＴ会議がもたれた。ＡＣＴ会議は総会と次の総会の間の三年間に、九ヵ月に一度集まり、活動の調整や財政問題を議論するものだが、シドニー会議では、オーストラリアということもあり、これまで関係の弱かった太平洋諸島の先住民族との出会いと交流を盛り込んだものとなった。日本からは私とヤイユーカラアイヌ民族学会の成田得平さんが参加した。

この会議で成田さんは、アイヌ民族の歴史、世界観、たましいを語り、多くの太平洋の先住民たちと経験を共有し、八九年のアイヌモシリでの国際先住民会議への熱いよびかけを行なった。同時にＰＰ21全体への取組みについて討議があり、ＡＣＦＯＤとして、国際共催団体に参加する、八九年のＡＣＦＯＤ第六回総会をＰＰ21と連動して初めて日本で開催することを決定した。この討議では、日本での開催が財政的にも非常に困難を伴い、危険だという意見も出たが、「アジア太平洋地域の民衆のオルタナティブを考える上で、日本がまず変わらなければならないし、そうしたいと願う日本の人びとの声を自分たちも聞き、共に議論をたたかわせたい。さらに、大国日本とはちがう日本に住む民衆のさまざまな闘いにふれたい」という思いが何人かから出され、「よし！日本にのりこんでいこう！」といったタイの仲間の声にみな賛同し、決定となったのだ。

その後八九年二月にネパールで、六月にはバンコクで、総会にむけた準備の会議がもたれた。ＡＣＦＯＤはこれまで、労働者、女性、農民といった各プログラムが各国にネットワークをもち、活動者のトレーニングや人的交流を行なってきたが、こうした経験を今後どう生かしていくのかが大きな課題としてあった。つまり、労働者であれば、南アジアと東南アジアでは状況もかなり違い、さらに香港、台湾、日本、オーストラリアではまた大きく異なる。こうした違いを労働者同士の眼で交流を通して具体的にたしかめあい、出会うことの意義はこれまでの活動としては大きいが、その上で、アジア太平洋というこの地域で各労働者たちがどのような新しい連携と共働を作り出せるのか。そうした次のステップを女性や農民プログラムももちろんのこと、ＡＣＦＯＤ自体の方向として模索をはじめた時だった。総会の準備過程でおのずから議論は、ＰＰ21がよびかけた「Alliance of Hope」の中身にうつっていった。そして何度か検討された結果、第六回総会のテーマは「民衆運動――希望、連合そしてオルタナティブ」となった。これまでの総会のように形式的な議事にしばられずに、中身の議論を重視することが提案され、ＰＰ21の水俣会議の共通議題とも関連させ、ＡＣＦＯＤとしては、「開発」、「フェミニズム」、「スピリチュアリティ（民衆のたましい）」の三つのテーマを選んだ。

第一日目は、この総会を受け入れてくださった水俣実行委員会代表の浜元二徳さんのあいさつで始まった。浜元さんが語る水俣の歴史、患者さんの闘い、浜元さん自身の人生に参加者は真剣に聞き入った。〝ミナマタ〟はアジアの人にとっては、現在進行している事態である。タイでもインドネシアでも、ＡＣＦＯＤに関わる活動者たちは、これまで各国で上（支配者）と外（外国資本）から押しつけられる「開発」に抗し、民衆の側にたつ発展や開発のオルタナティブを模索しつづけてきた。だからこそ、水俣の地で、これからの方向を探ることの意味は大きかったし、「ミナマタをこれ以上絶対に繰り返してはいけない。そのためにはどの国でも必要であれば、私は車イスで出かけていって訴えたい。今、アジアの人たちと手をたずさえて大きな力に抗する知恵と力をつけていきたい」と語った浜元さんの言葉が、参加者の胸をうった。

今回の総会は、参加者総数五六名。加盟国一四ヵ国から代議員として二名ずつ参加。さらにＡＣＦＯＤの友好団体であり、ＰＰ21の共催団体になった国際民衆組織からも、他のＰＰ21の行事に参加したあと、ゲストとして多くの参加を得た。

日本から今回は、遠野はるひさん（アジアの女たちの会）と鈴木和夫さん（トッパンムーア労働組合）が代表として参加。一六日から一九日までの会議のあと、全員がＰＰ21の水俣会議に合流した。

当初、総会を日本で開催することに、たぶん多くの参加者は大きな不安を抱いていたと思う。しかし、今回の総会が終始楽しく解放的に進んだのは、その陰で、福岡ととくに水俣の人たちの協力なしには考えられないことだった。

参加者の多くはバンコク経由で福岡空港に到着し、汽車で水俣へ入るコースをとった。八月二五日からアジアンフェスティバルをひかえ大忙しの福岡実行委員会のメンバーは、連日のように空港まで車を出し、出迎えと民泊を引き受けてくれ、皆を朝一番の汽車で水俣まで送り込んでくれた。同様に水俣実行委員会の仲間たちは、数日後にはじまる水俣会議の準備に大わらわの中、到着した参加者を駅から会場までピストン輸送。さらに宿舎から会場までの連日のバスの手配や「肉は食べない」「こんな果物がほしい」というあらゆる要求に、本当にきめ細やかに、一人一人の身になって考えてくださった。

ＰＰ21終了後まもなくＡＣＦＯＤの事務局からお礼の手紙が届いた。「水俣の夕陽と心やさしい人々をずっと忘れることはできません。」

ＡＣＦＯＤは、まだ日本の中ではあまり知られていない。この八月に九州や各地でつくられた新しい関係を基にさらに日本の中でのＡＣＦＯＤのつながりを広め深めていきたいと思う。